

アルパック ニュースレター



10月22日、秋晴れのもと華やかに京都の風物詩“時代祭”が繰り広げられました

アルパック ニュースレター もくじ

1996年11月1日

- アルパック・ベンチャーの道程と展望 2
- モザイク模様の都市計画 4
- 欧州北部の都市交通事情 6
- ケニア便り その4 8
- トイレから考えるまちづくり 11
- 道の駅と「三木山人と馬とのふれあいの森公園」 14
- パイロイトを訪ねて 15
- じじいがハムをつくり、ばばあがパンをつくる 16
- 新刊旧刊書評紹介 17
- まちかど 18

NO.80

アルパック創立30周年へ

アルパック・ベンチャーの道程と展望

— < 教育 > の原点と指針 —

三輪 泰司

9月6～7日、京都で「アルパックの新たな起業に挑戦！」をテーマに、96全社交流会を行いました。教え合い、学び合い、次世代へのベンチャー精神が始動しました。

次世代への若返りと共に、教育・研修も変わるもの、頑固に変えないものがあります。OJTと自習が原点

情報を素材にしている産業ですから、当たり前ですが、情報量の多いこと、全く脅威です。計画科学の日進歩も驚くばかりです。

教育・研修＝知的再生産は、情報型産業にとって生命を保ち、進化して行く必須要件です。アルパックの教育・研修は、創業期、唯一の「土曜ゼミ」に端を発し、次第に進化し階層別・専門別、事務所別・計画部別と縦横にシステム化し、注ぎ込む時間と労力も大きくなりました。創立4年目から始めた「全所研修会」は、12～21回は年2回方式で、本体だけで100名近くなると、半ばお祭になり、全社交流会へとモデルチェンジを始めました。

創業期、行政の経験も、専門の知識も弱い若僧ばかりで、委託者には随分ご迷惑をお掛けしました。記録によれば、研修会開始の前から、建設省、後に国土庁調査官の故・藤野良幸さんには、丁寧なお教えを受けています。以後“委託者から学ぶ”が鉄則になりました。

我々は学校ではなく、業務を遂行するのが“本分”ですから、学習・教育システムの基礎は、業務の中での、OJT－オン・ザ・ジョブ・トレーニングです。

これがクセモノです。幹部にとっては、大変な労力です。OJTは“適塾”方式と呼んでいましたが、先輩が後輩を教え、導き、共

に理解と進歩を得ます。鋭い感覚と純粋な思考力は、若者の特性です。成育環境が変わってきているのですから、ズレが起こるのも当然です。その上、我々の“総合性・委託者と共に”の方法に加えて、広い領域の全てをカバーする指導は、先輩にとっては、極めてハードです。

決して片手間、付け足しでは駄目。猛烈に勉強し、準備しなければなりません。教えることは学ぶこと。おかげさまで随分多くのことを学びました。こうして幹部自身が、オール・マイティ型へ、自ら育つわけです。私事ですが、中学2年の頃に、志を建て、本を年間1万頁読むと決心しました。実は大したことなくて、1日30頁でこなせます。それと、自分の専門から最も遠いと思う分野に興味を持つクセも役立ったと思います。

観察・討論・読書

従ってこの種の職能では、各自の計画的な自学・自習が基礎です。その中で、読書は3番目だと思っています。先ず、観察すること。

これは、一人でも、道を歩いていても出来ます。例えば、商店街を歩いていて、お菓屋さんは何軒あるだろうと勘定するとか、喫茶店で待ち合わせしている時、時計を見て5分間に通過する自動車を数えてみる。よく行く所ですと、時間帯や曜日が違うとどうか。これでも“オリジナル”情報を得たこととなります。観察は「現地・現場主義」の原点です。

次に討論。脳細胞は、刺激を受けることによって活性化します。素子が繋がるのでしよう。先ず“聞き上手”になること。細君の話にヘーッと感心することがあります。よく聞

き反省することによって、前向きに動きます。

観察にも、討論にも“問題意識”がなければただ時間潰ししただけですが、読書も選ばないと無駄なことがあります。「昔はものを思わざりけり」と言いますが、若い時は何でも手当たり次第に読むべきです。岩波文庫の「百冊の本」などは、20歳代までに読んでしまったら良いでしょう。年とともに“ものを思う”が増えてきます。読書は新知識修得型から、検証型へ移ってきます。

観察・討論・読書が「問題意識」を媒体として、サイクルしだすと、しめたものです。

このニュース・レターは、この3つが組み込まれていることに、お気づきでしょう。この編集方針も、不易の原則になるでしょう。

経験則と理論則

「小集団のアソシエイツ」の組織原則と「組織と個人の関係性重視」の人事政策が根底にありまして、アルバックが社員一人ひとりに奨励し、時間と経費を注ぎ込んでいるのは、「社会的活動」です。“3つの足”を持つことと言っています。即ち、①学会や職能団体など専門性でもって、②業務を通じ、或いは住んでいる地域などで土着性を、③趣味・同好・奉仕の団体でボランタリーに、です。

この“足”は、営業基盤を拡げる意味もありますが、学習・教育の角度から言うと、次のように展開して行きます。

その1、まとめること。観察や経験を総括し、文章でも映像でも、手段は様々であっても“記録”することです。組織としては、名古屋事務所で先鞭をつけた「業務報告会」があります。全所員が1年間の業務を総括し、発表します。会長・社長・副社長は出席義務者で、指導するわけですが、逆に所員に試さされているようで、くたくたになります。

業務上の守秘義務にかかわりますので、社

外秘ですが業務報告会の全記録は、印刷され社内での活用に備えています。新入社員研修会の講演、公開ゼミも全て印刷しています。社員の自主研究も同様です。1980年（昭和55年）の「新・駅前広場計画論の展開」（道家・杉原・伊坂の自主研究）などはその一例です。印刷しておけば、誰でも活用できますし、更に批判的に越えて行くこともできます。

これは次のその2「資格取得の奨励・推進」に役立ちます。現在、技術士は16名になっています。この試験は学位取得の予行演習みたいなものです。学問的知見の代わりに技術的経験の“まとめ”で、理論化の作業です。再開発プランナー等と共に“ドウ・タンク”型コンサルタントにとって、個人の実力を測るチャンスでもあります。

総務系社員も簿記・会計や情報処理の資格を取得し、業務を刺激し、サポートします。

その3は「教えること」です。仏教大学で、6名がチームで講義を担当させて頂いたのはユニークなケースです。国際的スケールでは現在、京都事務所の山田所長補佐が、ケニアの大学で、教育と大学運営に当たっています。教養を深める

次世代への課題は、知識や技術を貫く“哲学”即ち、ものの考え方を伝承し、その奥の“教養”を深めることです。文化的な素養の薄い企業は、持続力を持たなくなるでしょう。

知的再生産は活動全般に気を配り、監理＝Superviseする幹部の資質に掛かっています。

また、膨大な情報と、システム運営を管理＝Manageする本社機能、内部管理の総務部、対外活動の企画推進部の能力が鍵になるでしょう。それらは難しいことではなく、折角の社内出版物を繰り返し読み、まとめることで近づけます。

（取締役会長 みわ ひろし）

モザイク模様の都市計画

リム ボン

1. スtockベースの都市計画へ

住宅ストックの老朽化、環境汚染、人口の高齢化、違反建築の横行、地場産業の衰退、町並みの破壊等々、都市の機能障害をもたらす要因が相互連関的かつ複合的な問題群として発生している。これらは、都市単位で発生するだけでなく、都市内の様々なレベルで、局所的かつ同時多発的に、そして様々な形態で、いわばモザイク状に発生している。

したがって、複合的な問題群に対しては、従来のような課題と施策とが1対1対応をなす都市計画システムでは何ら実践的意味を持たない。ストックベースの都市計画にもとめられることは、あらかじめ用意された一般解としての制度を適用することではなく、個々の地域が自らの姿（実状）を見据えた上で、適切な特殊解を見出すプロセスを支援し、そのために必要な様々な選択肢を提供する技術として機能することである。なんとなれば、地方分権が時代の潮流となってる今日、これまでスーパースターに委ねられてきた都市計画の決定権が、様々な価値観を有した人々を母体とした市民参加のシステムへと次第に移行しつつあるからである。

2. モザイク画の魅力

以上のように、複合的な問題群を取り扱いつつ、都市の全体計画と個々の地区で展開される開発行為との関係を明らかにする都市計画システムの誕生が待たれている。都市とその構成単位であるコミュニティ（様々なレベルでの捉え方がある）の相互依存関係をダイナミックに描き出す手法を開発し、これを基に都市の全体計画と個別開発との政策的整合

性を提示する新たな都市計画理論を構築する作業に取り組まなければならない。

そこで、近代都市計画がスタティックな「塗り絵（塗紙計画）」であったことに対して、よりダイナミックで実際的な思想で構築されるストックベースの都市計画のことを「モザイク模様の都市計画」と名付けてみよう。ヒントとなったモザイク画そのものは次のような特徴を有している。

「モザイク画とは、いろいろな色彩の石・ガラスその他の小断片を1平面全体に並べ、それによって模様や図柄をあらわす芸術であって、それはあたかも虫がうごめくような生き生きとした色彩で表現される。モザイクは完全な平面ではなく、かなり不規則である。各テセラ（断片）はさまざまな方向へ光を反射するので、ダイナミックな輝きがみられる。さらに、モザイクの各テセラ（断片）が各々の独立した色彩単位をなしているのだが、それを一定の距離からながめると全てが美しく混合して、印象深い全体像を醸し出す」（柳宗玄、『モザイク』、平凡社世界大百科事典、1981年）。

3. 平均的思想からの脱却

従来都市計画図をみると、開発予定地や保存地域、あるいは土地利用現況などが面的に塗られている。いわば個々の開発の結果が平均化された形で表現されているので、都市全体としてのマクロな目標像についてはある程度イメージしやすくできている。しかし、個々の開発行為が個別地域にどのようなインパクトを与えるのかという点についてはイメージしがたいものとなっている。これに対し

て、モザイク模様の都市計画は、全体としての構図（マクロな計画）を表現すると同時に、個々のテセラ、もしくはテセラ間の結合体としてのコミュニティの持つ性格や役割が明確になる。つまり、モザイク画ではテセラを植え込む際に、ひとつひとつの色彩や植え込み角度などの工夫による光の照らし具合などが全体構図の表現に大きく関与するのであるが、都市の構造もこれと全く同じ原理でとらえることができるのである。

4. マクロ計画と個別プロジェクトの乖離を越えて

このような表現手法を都市計画に応用すると、大小様々なテセラが混在する都市のモザイクパターンを無数に描き出すことができ、同時に、居住地の局地的性格をかなりの臨場感を伴って描き出すことが可能となる。これは、都市計画におけるマクロ計画と個々の居住地が担う役割との関係を明確に示すのに役立つ手法である。

このような手法を欠いた従来の都市計画や住宅政策は、マクロ計画と個別地域、あるいは行政と住民との間に対立関係をもたらしてきた。たとえば、ある地域で公共住宅団地なりマンションが建設される場合に、それは都市圏レベルでの住宅供給計画に合致している場合でさえも、地元の地域社会の反発を招くことが多々ある。

開発投資という行為は実際には個別の地域で展開される具体的現象であるにも関わらず、きわめて抽象化されたマクロ計画が存在するのみで、個別地域における開発投資の意味、すなわちその地域が都市のマクロ計画の中でどのような役割を担うべきかについての合意形成を行政と地元コミュニティとの間で図る努力を怠ったために発生する問題である。このような状況を克服するという意味も含めて、

モザイク模様の都市計画はマクロとミクロの結合を描き出す手法であるといえよう。

5. 京都での実験、そしてアルバック

非戦災都市である京都の既成市街地（とりわけ都心部）は、今なお多くの定住人口と住宅ストックを抱え、同時に、伝統産業と先端産業とが融合したしなやかな産業構造に支えられながら、重層的な文化的ストックを継承している。同時に、「開発」と「保存」の調和（景観問題を含む）、老朽住宅ストックの更新（袋路問題、違法建築問題）、高齢者の居住福祉、若年世帯の新規転入、多世代交流コミュニティの実現等の課題に対して、複合的かつ緊急に取り組まざるを得ない状況に直面している。すなわち、京都市は、良くも悪しくも、他の大都市よりもモザイク模様の都市計画を先進的に推進し得る下地が既に整っているのである。

たとえば、京都にあってまさにこのような問題群を抱えている崇仁地区であるが、住宅地区改良事業はまだ半分しか完了していない。そこで、住民たちは、真の意味での住民主体のまちづくりを達成するために、組織や団体の壁を乗り越えて互いに協力し合い、「まちづくり推進委員会」を結成した。これは、当該地区においては画期的な出来事である。そして彼らは、地域密着型の仕事を展開し、同時に、会社としての組織力をも備えた専門家集団の協力を要請した。現在、石本幸良氏をはじめとするアルバックのスタッフの皆さんが現場を支えておられる。冷静な地域分析と的確なアドバイスによって、住民たちは安堵し、また、将来への展望もおぼろげながら見えてきたようだ。今後の展開が楽しみである。（立命館大学産業社会学部助教授 リム ポン）

欧州北部の都市交通事情

森脇 宏

はじめに

8月末から9月半ばの半月ほど、欧州北部の都市交通事情について、視察に行ってきました。日本都市計画学会関西支部の都市交通問題の解決方策研究会（代表：天野光三・大阪産業大学教授）による視察団の一員として公共交通や歩行者優先策等を中心的テーマにスウェーデン、ノルウェー、オランダ、ドイツ、ベルギー、イギリスの6ヶ国を駆け足で回ってきました。その成果については、いずれ視察団による報告書が作成されますので、詳細はそちらに譲り、ここでは幾つか全体的に共通する印象を簡単に書いてみます。

柔軟な発想と運用

バスの輸送力を高めるための連結バスや、路面電車が路混雑区間の渋滞を避けて地下化するの、日本では様々な制約からできていませんが、訪れた多くの都市では実施されていました。これらに加えて、幾つかの都市では、個々の事情に対応した新たなシステムを柔軟に発想し、運用していました。

例えば、ドイツのエッセン市では、道路の混雑する区域において、路面電車の専用軌道内にシュプールバスと呼ばれるバスも走らせ

バスの定時性等を確保しています。このバスは、車道より狭い専用軌道を走れるように制御装置を備えたバスで、道路が混んでいない区域では、一般の道路も走っています。また、一部の電気バスは、地下化された軌道を路面電車と一緒に走っています。さらに、路面電車の不採算区間では、廃止するのではなく、専用軌道を残し、そこを走行するバスに転換し、コストの低減によって採算性を高める工夫も行われています。

ベルギーのブリュッセル市では、路面電車の地下化区間を順次延長し、ある程度の区間が地下化された段階で、路面電車より速く、乗客を大量に運べる地下鉄車両に置き換える方式を取っており、これをプレメトロと呼んでいます。このため、路面電車の地下化に際して、トンネルや駅等の構造物は、あらかじめ地下鉄車両が走れるように設計・施工されています。写真2は地下のホームですが、路面電車にあわせるため、今は高さを下げており、その段差処理の階段がホーム奥に見えます。

チャレンジと情報公開

自動車を抑制し、環境や歩行者を優先する

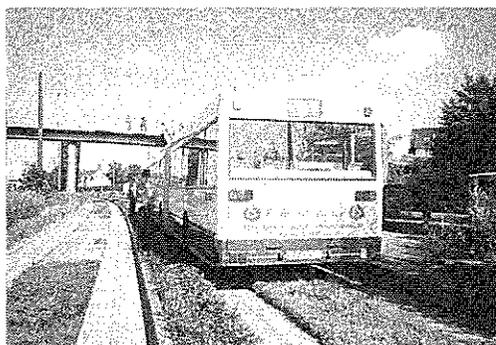


写真1：エッセンのシュプールバス



写真2：ブリュッセルのプレメトロのホーム



写真3：ケルンのトラフィック・カーム・エリア



写真4：アムステルダムの駅前の自転車

施策は、各都市で多様に試みられています。有名なオランダのボンネルフは、自動車に対しては一方通行化と速度低減を、歩行者には歩道や植栽等の確保を図る歩車共有道路ですが、ドイツでは、個々の道路の対策だけでなく面的な対策が、歩道のある比較的広い道路も対象に、通過交通の抑制も含めて試みられています。例えば、ドイツのケルン市では、トラフィック・カーム・エリア（交通静穏化地域）を設定し、面的に速度・駐車・交差点処理等の制限を行っています。写真3の右上に見える人と車と家等が描かれた標識が、このエリアの入口に立っています。

興味深かったのは、各都市がチャレンジを競いあうだけでなく、その評価を自ら行い、失敗は失敗として率直に評価し公表していることでした。このように失敗の情報を公開することは、ある意味で失敗が許容されることであり、それ故、様々なチャレンジが大胆に試みることも可能なのだろうと思いました。

自転車交通の位置づけ

近年の環境指向の中で、自転車が都市交通として大きく位置づけられてきたように感じられました。自宅から職場まで自転車で通勤することが可能な通勤圏の都市が多いため、一概に日本と比較することはできませんが、多くの都市で自転車道が積極的に整備されてきています。都市の幹線道路に歩道が当然あ

るように、自転車道も整備されるような時代になるのでしょうか。

こうした傾向は、全体としては理解できませんが、二点ばかり気にはなりました。一つは、自転車に対する歩行者の安全確保です。自転車道は自転車専用ですから、相当なスピードで走っています。自転車専用とは言っても、どこかでは歩行者と交錯しており、そこでは歩行者との事故が心配されます。いま一つは、駅前での駐輪問題です。自宅から職場まで自転車で通勤する人は多いものの、最寄駅に自転車を置く人もいます。写真4はオランダのアムステルダム中央駅で、東京駅のモデルともなった駅ですが、数多くの自転車が並んでいて、好ましいとは言いがたい景観であり、こうした光景は幾つかの駅で眺めました。

おわりに

その他、都心の駐車場対策や公共交通利用促進策等、幾つか印象に残ったことがありますが、紙面の都合もあり割愛します。

最後に、視察の最終地であるロンドンで、視察団長の天野先生が、大阪産業大学の学長選挙に当選されたという朗報が飛び込んできたことをご報告いたします。当然、その夜はシャンペンをあげ、大いに盛り上がりました。

（大阪事務所 もりわき ひろし）

ケニア便り その4 — シャルモヨ訪問記 —

山田 克雄

今回は、ナイロビ市の中でアフリカ人が住む下町であるシャルモヨ地区を訪問した時のことを報告します。

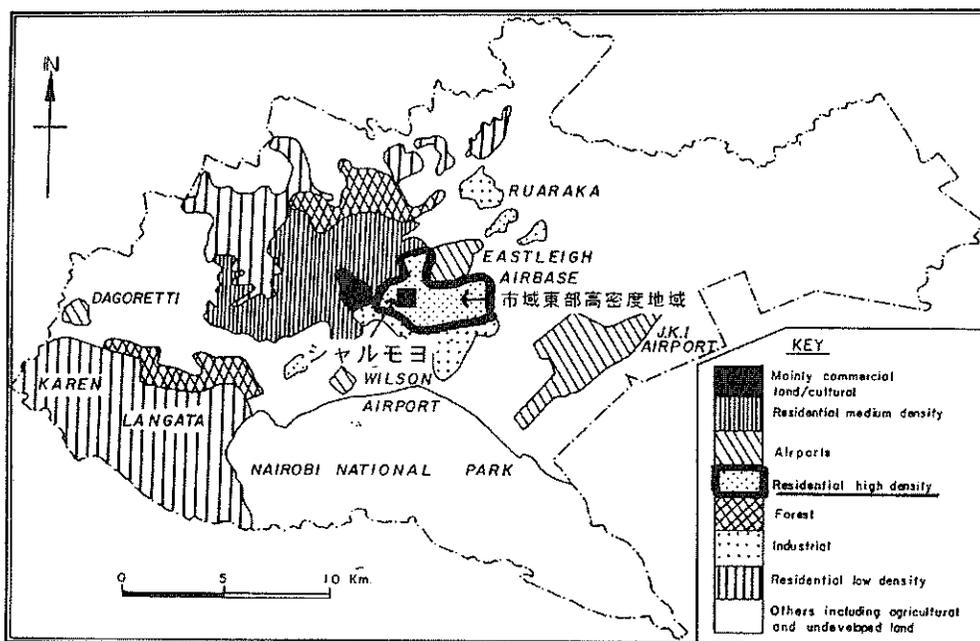
シャルモヨ地区再生計画

今年の4月からの新学期は、予定どおり始まりました。授業料等のシステムが変わったため、学生の抗議活動による授業開始が危ぶまれ、建築学科でも始まって早々昨年の成績評価に対する抗議等を理由として、学生の授業ボイコットがありました。しかし、さほど大きな混乱もなくおさまり、新学期はスタートしました。私が受け持っている5年生の設計演習は、2つ目の設計課題に入り、アーバンデザインが課せられているため、ナイロビ市内のシャルモヨ (Shaur Moyo) 地区を対象とする地区再生計画を与えることになりました。設計課題は、実際の敷地をとりあげ、そこでの計画及び設計を行う方法をとっていま

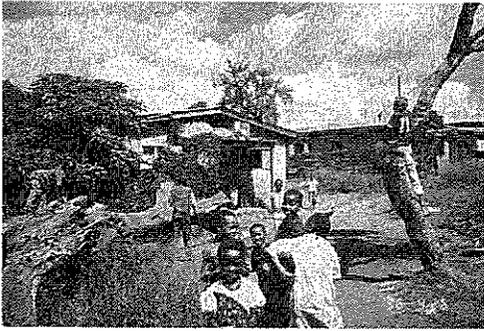
す。そのため、まず現地を訪問し調査することから課題への取組が始まります。

アフリカ人のまち

ナイロビは、前世紀の末にケニアの海岸地域の町モンバサと内陸のウガンダを結ぶ鉄道工事のキャンプ地となったのが都市の始まりでした。今世紀の初め1905年には東アフリカ保護領の政府が置かれ、コロニアル都市として発展することになります。「愛と哀しみの果て (原題 Out of Africa)」という映画があります。主人公のカレンがデンマークからケニアに移住し、ナイロビ駅に着いた時のシーンに、コロニアル都市として今世紀初頭の当時のナイロビ市の様子がうかがえます。白人による白人のための都市づくりを目指すコロニアル都市では、アフリカ人の存在を無視し、ナイロビ市ではナイロビ川の下流側である市域東部の低湿地に原住民居留地を設定



City of Nairobi: Land Use Patterns



シャルモヨ（公営住宅）



住宅地に隣接するスラム

し、アフリカ人を隔離しました。そのため、昔は人種による、現在では所得による住み分けが行われており、結果的に所得の低いアフリカ人の多くは、当初の原住民居留地を中心にして市域東部に住むことになります。現在では、人口の増加に伴い、方々に無断居住者（スコッター）が住むスラムが拡大しています。そのためアフリカ人のまちとして市域東部は、大変な高密度居住地域になっており、まちの姿はその他の地区と全く様相が異なっています。シャルモヨは市域東部に作られた初期のアフリカ人の居留地で、現在はナイロビ市が管理運営する低所得者向けの公営住宅地となっています。

来なかったスクールバス

課題説明の後は、スクールバスで学生を連れて現地調査に行くことになります。当日、私はナイロビ市内に住んでいるため、市内で待ち合わせ場所を決めスクールバスを待つことにしました。同僚の教員がいろいろと注意をくれます。服装は汚く、時計ははずし、集団で行動することなど。現地の人でも低所得者が住むアフリカ人のまちは危険で、よく盗難にあったりするそうです。普通のカメらは心配なので使い捨てカメラを買い、財布はもたず、現金とIDカードをポケットに入れて待つことにしました。約束の時間が過ぎてもバスは現れません。しかし、時間が守られないのはいつものことで、いちいち腹を立てて

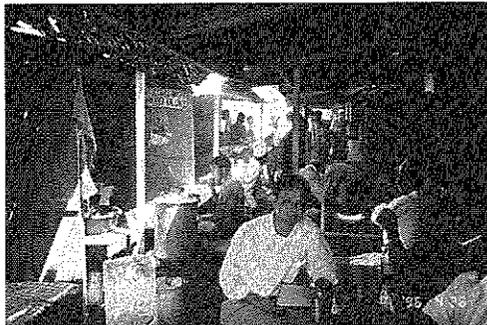
いてはつとまりません。しかし1時間過ぎても来ず、朝10時の約束が昼近くになってしまいました。オンボロスクールバスの故障かも知れませんが、現地へ行ってしまっているのかも知れません。タクシーをつかまえ、現地へ行くことにしました。

警察に捕まる

さて現地に着き、タクシーでまわりますが学生の姿もスクールバスも見つかりません。まあしかたがないと思い、現地の写真は何箇所が撮っておくことにしました。ちょっと想像はしにくいですが、住宅のほか、“ジュアカリ”という手工業が行われている一帯や、露店・マーケット、教会、スラムのバラック、ゴミ捨て場（ゴミの山）など、敷地及び周辺は混沌とした状況で、人であふれています。ポリステーションが敷地に隣接してありますので、そこも写真に撮ることにしました。カメラを構えると一人の警察官と目があいました。これはまずいと思い、車を進めるように運ちゃんに言いますが、恐れてたとおり警察官がとんで来ました。というのは、ケニアに限らず発展途上国ではむやみに写真をとると、問題をおこすことがあります。空港や国防施設はもちろんですが、送電所や石油備蓄施設など、写真撮影は禁止されています。警察署に連れて行かれ、事情聴取を受けることになりました。学生と一緒に勉強のためこの調査をしている、スクールバスが来ている



住宅地中心のカフェテリア



公営住宅に隣接するマーケット
(ヤマチョマを食べる)

はずだと言いますが、学生もスクールバスも見えていないと言って納得しません。結局、フィルムを出して渡すようにと言います。これは使い捨てカメラなので、フィルムを取り出すことは出来ないと言いますが、理解されなかったようです。なんと言ってもラチがあかないので、目のまえでカメラを分解し、フィルムを取り出しました。これで解放されたわけですが、きっとカメラを壊したと思われるでしょう。外に運ちゃんと一緒に出ると、彼がタバコを差し出しました。運ちゃんも警察は怖いようです。禁煙を普段していますが、ほっと一息つきました。

マーケットでヤマチョマを食べる

結局その日はスクールバスは来なかったわけですが、理由は大学で他学部の学生がストライキをおこし、バスが出発できなかったためです。このストも1日で終わり、あらためて現地調査を実施することになりました。

前回で懲りていますので、今回は昼に学校から出発することになり、バスに同乗して無事現地に到着しました。住宅は一棟7室の平屋で、各室が一戸となっています。つまり7戸の長屋ということになりますが、一戸は一部屋しかなく、各棟が共同利用する便所が離れてあります。この一部屋に平均7人ぐらいの家族が生活することになります。これでも家賃 400シル (約 800円) を立派に払っている公営住宅であり、住宅地の中心の民有地に

はなかなか洒落たカフェテリアが開店しています。また住宅地に隣接して公営マーケットが開設されており、ここで昼食をとることにしました。ケニア料理で有名なのは焼肉でヤマチョマと言います。いろいろな肉を焼いたのを塩で食べる素朴な焼肉ですが、マーケットの一角はヤマチョマ屋が並び味を競っています。ひとつのヤマチョマ屋に入ると、とても歓迎してくれ、食べおわると親しみをこめてまた来るように言われました。

アフリカ人の住宅と生活

一部の金持ちのアフリカ人は、白人居住地だったナイロビ市西北部の高級住宅地であるハイランドに住んでいます。大多数の人はシャルモヨにみるような地域に住み、ナイロビの7割の世帯が一部屋に住んでいるといわれています。最近では郊外に新しい住宅地が拡大し、一部に中間の所得層が住む住宅地開発がみられますが、まだまだ限られたもので、しかも投資対象として購入されているところもあります。生活も全く別れており、先進国と同じ生活が行われているハイランドと現地の人々が暮らす地域では物の種類、値段も全く異なっていて、異なった経済原理で生活が行われています。現地の人びとの生活を想像することは難しいですが、東部地域をはじめとして大多数の人びとが暮らすナイロビの都市生活が外国人や旅行者とは別にあります。

(京都事務所 やまだ かつお)

—嵐山トイレワークショッパー— トイレから考えるまちづくり

藤 正三

先頃京都市で、これまでとは違った試みが行われました。公衆トイレの建て替えに当たって、担当業務の枠を超え、庁内の若手？職員と、立命館大学、京都工芸繊維大学の先生及び学生をはじめとするボランティアが中心となって、地元住民の参加のもとワークショップ（以下W・Sと略す）が開催されました。

今回、W・Sを行った場所は観光地で有名な京都嵐山にある中ノ島公園内の公衆トイレです。これは昭和26年に建てられた木造、男女兼用、汲取式の公衆トイレで、かなり老朽化しており、一般的に公衆トイレが抱えている4K（汚い、暗い、臭い、怖い）の要素を十分兼ね備えています。周辺には独特の臭気が漂い、痴漢が出没するなど、観光地嵐山に相応しくなく、地元住民からは迷惑がられている公衆トイレです。

この公衆トイレの建て替えが、今年の春に持ち上がりました。担当課は、規模、設計条件、予算に制約がある中でいかに地元住民に喜ばれ、利用者のニーズにあったものにしていくか、試行錯誤をしていました。これまで行政側が建て替え案を出し、これに同意を求める方法が主流でしたが、これでは住民のニーズに本当に答えることができません。

そこで担当課以外からも「住民本位に、住民参加で建て替えをするべき」との声があり、今流行りのW・Sで建て替えをすることになりました。

W・Sにあたっては、担当者をはじめW・Sに関心のある清掃局、都市計画局、都市環境局、都市建設局などの若手市職員、ボランティアなどの有志が集まり、論議を重ね、

次のようなスケジュールでW・Sを行うことが決まりました。

- 1 最地元W・S（'96.5.28）
- 2 プレW・S（'96.6.26）
- 3 同時多発チャンネルW・S（'96.7.5）
- 4 デザインW・S（'96.7.16）
- 5 まとめのW・S（'96.7.30）

最地元W・S

地元の嵯峨連合会会長の小川さんをはじめとする、嵐山保勝会などから、13名が参加し、行政と一緒に4グループに分かれ同じテーブル座り、嵐山のことや公衆トイレの建て替えに対する意見を聞くW・Sを行いました。そしてW・Sへの同意や具体的な建て替え計画への意見を聞くことができました。

プレW・S

ここでは「表のW・S」と「裏のW・S」の2つのW・Sが行われました。「表のW・S」では中ノ島で商売などをしておられる方々が参加し、グループに分かれ嵐山の公衆トイレについて困っていること（トイレの近くで商売する上で困ったこと、観光客から聞かれる声）を聞くW・Sが行われました。

一方、「裏のW・S」では、学生などのボ



建て替え予定のトイレ

ランティアを中心に、公園内のトイレの利用実態調査（建て替え予定の公衆トイレを含め、3ヵ所の公衆トイレがある）と観光客突撃インタビューが行われ、利用の実態を把握しました。これを短時間でまとめ、「表のW・S」で成果報告しました。

同時多発チャンネルW・S

ここでは地元の方々、市職員、ボランティアが一つのチームとなり、突撃インタビューを行い壁新聞をつくる「壁新聞づくりW・S」、清掃作業のデモンストレーションやトイレにまつわるクイズ、トイレ博士によるうんちく話を行う「いつまでも美しいトイレを考えるW・S」、嵐山・嵯峨野の公衆トイレなどを見て回る「ウォークラリーW・S」の3つのW・Sを同時多発的に行う予定でした。しかし、生憎豪雨に見舞われ、予定を変更して開催しました。清掃作業のデモンストレーションやウォークラリーは中止となったものの、地元のご好意により「ホテル嵐亭」をお借りして、嵐山・嵯峨野の地域の皆さんに地域の思いをポストイットに記入しそれを大きな地図に貼ってもらう「ガリバーマップづくり」を行いました。

デザインW・S

これまでのW・Sで出てきた意見を踏まえ、「あなたもまちの建築家」をテーマに、5グループに分かれ「広さ体験」、「設計のテーマ選び（3択）」をし、設問カードに従って

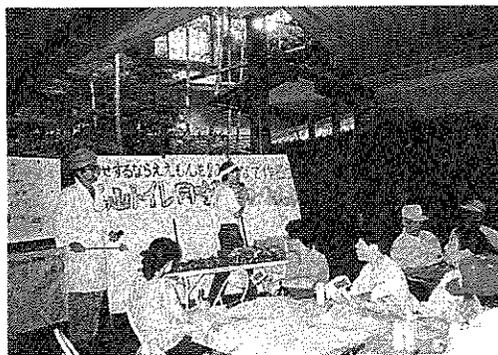
「配置」、「敷地と建物タイプ」、「入口の位置」を決めていきました。さらにこの条件に基づいて、パーツなどを駆使しながらプラン（模型）を作っていました。

それぞれのプランは、奇想天外な発想はなく、どれも制約条件（規模など）を守った現実的なもので、問題点（4K）を率直に受け止め、いかに改善していくかという視点で作られた力作ばかりでした。

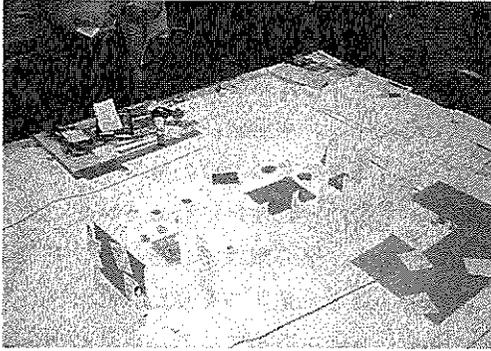
まとめのW・S

前回のデザインW・Sで作られたプランとその時の参加者の評価をもとに、庁内などの技術者集団が知恵を出し合いながらまとめたプラン（模型と平面図）を地元に掲露しました。

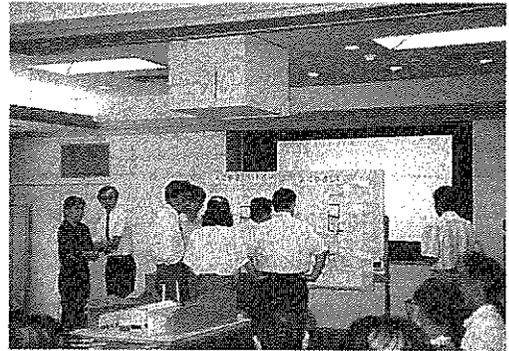
プランは「人にやさしいトイレ」をテーマに、配置、デザインを工夫して、南北に長い数寄屋風の女性専用トイレになりました。トイレには、老若男女や車椅子でも利用でき、おむつを替える台や子ども用の小便器も備えた多目的トイレを設置しました。また、窓にはのぞき防止の格子をつけ、植栽は低木にして痴漢がひそむ場所を作らないなど、痴漢防止策を盛り込んだものになりました。さらに、トイレ利用者のマナーの向上を狙い、汚した人や汚れに気づいた人が手軽に掃除ができるように掃除道具を備えるなど、これまでのW・Sで出てきた意見が反映された公衆トイレプランになりました。



同時多発チャンネルW・S



デザインW・Sの作品



まとめのW・S

これら一連のW・Sでは、事前の準備会なども行われ、地元、市職員、ボランティアなど、総勢数十名がW・Sに参加・協力しました。

特に業務担当者をはじめ市職員は、最初は不慣れなW・Sを行うということで、戸惑いと不安を持っていましたが、回を重ねるごとに皆さんの協力の甲斐もあって楽しく、顔色も変わり生き活きとしてくるようになりました。これがワークショップの魔力なのかと思わせるほどでした。

今回の住民参加のW・Sや公衆トイレのプランに対する地元の評判は上々で、概ね成功したように思われます。来春トイレが完成した時には地元の方々が「これは自分たちのトイレだ」という愛着を持ち、維持管理されることを期待します。

また、今回の経験を通じて庁内でも業務担当レベルだけの縦割りではなく、横断的なつながりができるようになりました。

この一連のW・Sには、KBS京都の取材も来ており、8月11日に放映されるとともに、庁内でもビデオを作成したり、参加者名簿を作成したりしています。また、市民新聞にも掲載され、多くの方々にこのW・Sを知ってもらえるようになりました。さらに嵐山の公衆トイレの前にはW・Sで行った壁新聞などが掲示されており、地元住民の関心も広がっ

ています。このW・Sを通じて様々な方面にネットワークが広がっていったように思われます。

参加者はこの経験を通じ、目標に向かって一致団結して、協力すれば何事も達成できるということが実感できたと思います。

今回は公衆トイレの建て替えという「点」の整備ではありましたが、今後はこの関わりを活かしつつ「線」、さらには「面」へとつなげた、まちづくりへと発展していくことを期待します。

しかし、W・Sをただ流行りだから、住民に受けるからということを手軽に利用したり、そのテクニックをだけを模倣し、本来まちづくりにあるべき住民主体、住民参加をW・Sをただで済んだかのようにしたり、行政の身勝手を同意させる道具として利用したりするようなW・Sの利用は、何かはき違えているように思います。W・Sをすれば良いのではなく、住民主体を基本に考え、その1つのコミュニティ形成の手法として、W・Sがあることを忘れてはなりません。それを通じて意識が高揚し、住民主体のまちづくりが生まれてくるのではないのでしょうか。

一度W・Sを問いただす時期が来ているのではないのでしょうか。

(京都事務所 ふじ しょうぞう)

道の駅と「三木山人と馬とのふれあいの森公園」
内村 雄二

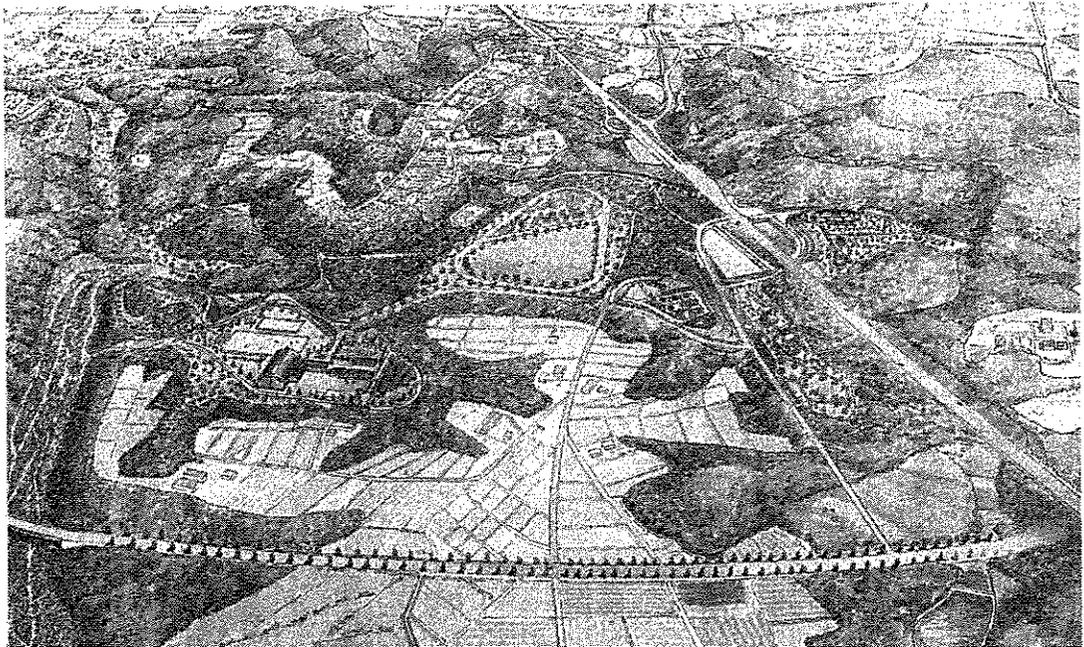
イチローが「変わらなきゃ」といい、野茂が「Big Change」という今日この頃、道路も変わってきている。幹線道路、高規格道路など堅いイメージの建設省が、道の駅という親しみやすい言葉を使ったユニークな施設を生みだし、国道や県道に快調な事業展開を進めている。道の駅は1993年から各地に登場し、現在313箇所（1996. 8. 5時点）を数える。

かつて、港湾を港（みなと）と呼び、人々に親しまれる水辺づくりを始めたウォーターフロントブームを彷彿とさせる。近代化、モータリゼーションという波に置き去りにされた古き良き道（街道）の風情（宿場、陣屋など）を現代流にリバイバルする意味で、まさに、ディスカバー「みち」といえる試みと思われる。

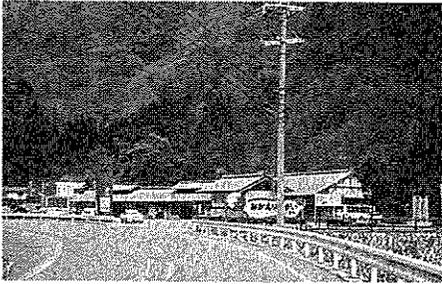
道の駅は、休憩、情報の交流、地域の結びつき（ふれあい）の3つの役割を果たす施設

をめざす。まちおこし、地域振興のシンボル、新たなコミュニティ施設として大きな期待を寄せられている。地場産品を販売する物産館や博物館をあわせもつもの、温泉やキャンプ場のあるものなど個性化に努めている。また、宿泊施設をもつ道の駅は、40箇所にのぼる。

この道の駅を、是非つくりたいと思って、いま懸命に計画を進めている。場所は、兵庫県三木市の三木山という所で、国道 175号線の沿線にあたり、山陽道三木小野ジャンクションから南約3 kmに位置する。一日あたり2万台以上の車の往来があり、まさに道の駅立地に打ってつけのところである。ここは、林野庁の森林空間総合利用整備事業（ヒューマン・グリーン・プラン）に基づく 165haの国有林野を活用し、国内初の国際級総合馬術競技場を目玉とする野外レクリエーション基地の建設が進められている。三木市及び財団法人三木山人と馬とのふれあいの森協会（三木市とJRA：日本中央競馬会の設立）が、公園部分約 140haの事業主体で、本年1月より着工し、平成11年春の全体完成を目途にして



三木山ヒューマングリーンプラン完成予想図
右側の施設が道の駅



兵庫県千種町の道の駅
ツチノコの指名手配ポスターがある

いる。道の駅は、残り25haの場所に、来園者のためのゲストハウス（宿泊施設）とともに整備される計画で、第3セクターによる建設、経営を予定している。現在、第3セクターの立ち上げ段階にあり、多くの課題を抱えているが、実現化にもう少しで手が届きそうである。着工の見通しがつく頃、あらためて具体的な内容をご報告したいと思う。

（大阪事務所 うちむら ゆうじ）

パイロイトを訪ねて

小竹 暢隆

パイロイトへ

フランクフルトから鉄道に乗りニュールンベルグで乗換え、4時間前後で北部フランケン地方に入る。その中心であるパイロイト（バイエルン州）は人口72,000人の小さな町であるが、「緑の祝祭都市」として世界的な名声を獲得してきており、毎年7、8月の音楽祭のシーズンには世界中から1万人ものオペラファンが詰めかけ様相が一変する。

ワーグナー自身が祝祭劇場を建設し（1874年）、毎夏に一人の作曲家の楽劇だけを集中的に上演する音楽祭、孫のヴォルフガング・ワーグナーが、今日なお当主として健在なことなど、祝祭劇場のあるパイロイトの丘は、一種の「聖地」とも言える。

パイロイト音楽祭1996

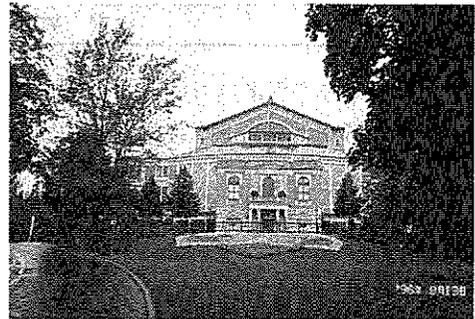
今シーズンは7月25日から8月28日である。今回は、ワーグナーが26年余りの歳月を掛けて完成させた、上演に4日間、約15時間を要する『ニーベルングの指輪』を8月中旬のシリーズで観ることができた。チケットは世界中のワーグナー協会から割り当てられるため、入手はそれほど容易ではない。

1994年からの新演出は、機知と獨創性に溢れる視覚的な舞台であるが、今年の批評も冷ややかなものが多かった。その一方で、パイロイトの歌手陣は充実してきていると言われる。歌手の中でドイツ人は半分以下である。

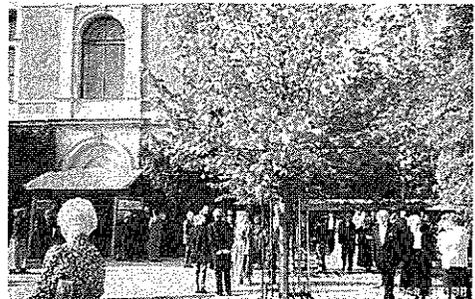
第3夜『神々の黄昏』でグートルーネ役の歌手は当日声が出ないということであったが、本人は演技をし、別の歌手が舞台の端で譜面を見ながら歌っていた。「演技者にして歌手」ゆえの光景だろうか。

祝祭劇場周辺の光景

序夜『ラインの黄金』以外は午後4時に始まり10時前後に終了する。それぞれの幕間は約1時間あり、劇場の外に出ることができ、



「聖地」パイロイト祝祭劇場



タキシードとイブニングは「聴衆の退化」?

観客の多くは周辺の森を散策している。

同じワーグナーのオペラでも他の場所で観るのとは意味が異なる。人里離れた地方都市は、他の音楽祭開催都市に比べ観光資源も限られているが、バイロイト独特の雰囲気がある。字幕もない祝祭劇場は、楽劇に集中するしかない。

キャンセルチケットを巡って熱烈なワーグナーファンたちと知り合うことができた。チケットなしでバイロイトに、「Suche Karte (チケット買います)」という紙切れを持って立っている日本人も何人かいた。

おわりに

いろいろな意味で、大変な費用を掛けて行った甲斐があった。バイロイトを後にして、ニュールンベルグやバンベルグを回った。共に素晴らしい街であるが、紙面の都合で別の機会に譲りたい。

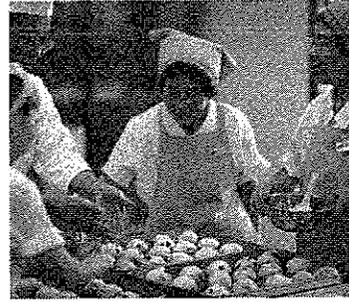
(名古屋事務所 おだけ のぶたか)

じじいがハムをつくり、
ばばあがパンをつくる

中室 紋子

以前に本紙の“うまいもの通信”で取りあげた足助町福祉センター「百年草」のその後の展開です。

足助町(愛知県東加茂郡)は香嵐溪という紅葉の名所を背負った観光地です。「百年草」は老人福祉センター、デイサービスセンター、ZiZi工房、宿泊施設からなっています。平成7年に新しく“バーバラはうす”がオープンしました。ここでは、約40種類のパンが足助町のばばあたちの手によってつくられています。ハムの次はパンです。洒落てますね。これで名実ともにじじいとばばあが揃ったわけです。何ともめでたいですね。



バーバラはうすで働く“BaBa”たち
出展：パンフレット

“じじいがハムをつくり、ばばあがパンをつくる。”昔話でいつか聞いたフレーズに似ていませんか。

パンの製法も、パン種を少し取っておいてイースト菌を増やしてまた次をつくるというヨーロッパ正統派スタイルです。工房内には、パンがその場で食べられるコーナーがあります。私もパン職人のはしくれなので、食べてやろうと楽しみにしていたのですが、3時頃には売り切れ御免、という状態でした。

ここにいると、ここが福祉センターではないように感じます。高齢者と観光客、職員がほどよくブレンドされてここにいるのです。

「百年草」は、少し遠いところを見据えながら、着実に目標を実現しているようです。その昔紅葉を植えた町の人がいて現在の香嵐溪があるように、高齢者とハム・パンという足助町にとって新しいものが今後定着していくのでしょうか。自分のまちをよく知り、活かせるものは活かし、その実現のために頭をひねる。考えられるあらゆる補助を県や国から獲得し、町の施設でありながら人件費・材料費くらいは採算をとろうというスタンスを保っています。そのあっぱれなしたたかさに、現代の“七人の侍”を見るようでした。

さらなる展開として、健康と交流をテーマに、薬膳料理のレストランや温泉活用を考えているということです。足助町はまだまだ遠くを見ているようです。

(大阪事務所 なかむろ あやこ)

新刊旧刊書評紹介

わたせ せいぞう 著

講談社

『菜』

紹介 森川 宏剛

表題の『菜』は、「さい」と読みます。この物語の主人公の女性の名前です。

この『菜』は、富田耕平、菜夫妻を主人公に、ふたりとふたりを取り巻く人達や動物達、草花達のささやかな日常を描いた物語です。大家族に囲まれにぎやかに育った耕平と、両親に先立たれその思い出を刻む家に暮らしてきた孤独な菜という対照的なふたりが、出会い、夫婦として結ばれ、周囲の人達に支えられながら、愛情一杯の家庭を営んでいきます。

そんな日常の情景が四季折々の草花や美しい日本の風物詩をちりばめながら鮮やかに描かれています。また、本編とは別に歳時記ならぬ菜時記として、その季節毎の風物をコラムとして紹介しています。

耕平さんは物理学者で、「フェルマーの定理」の証明をライフワークにしています。しかし、正論を通すあまり教授と対立し、助教授のイスを蹴って大学を辞職してしまいます。今は、家庭教師をしながらの毎日です。

菜さんは、いつも母親の形見の和服を着ていて、作者によるとサ行の女（サ：裁縫、シ：刺繍、ス：炊事、セ：洗濯、ソ：掃除）だそうです。おっとりしていて、でも「経済的にも大変だろう。耕平君ももう少し融通をきかせればいいんだが」という教授に「耕平さんは心の豊かさで生きて行ける人です」とはつきりいうような女性です。

この本を私に紹介してくれた友人（友人といってもずっと年上の旅館の若旦那ですが）は、この菜さんがお気に入りです。「今の世の中こんな女性はいないでしょ。」と仰ってましたが、この菜さんのキャラクターと、耕平

さんや周囲の人々、動植物達、彼女の住むまちにそそぐ豊かな愛情が、この作品のメインテーマとなっています。

舞台は鎌倉の



下町で、ふたりが暮らすのは、菜さんの親が残してくれた昭和初期頃に建てられた木造家屋です。昔ながらの町内会があり、金物屋や豆腐屋、石屋、小唄が趣味のおばあちゃんが登場し、町内会長の耕平さんは、近所でいたずらばかりするのら猫の捕獲に奮闘します。少し前まで、そこかしこにあった情景なのでしょう。

作者は自分の子どもの頃の記憶を辿りながら、作者の思い描く豊かな暮らし、ゆとりある暮らし、生き方の夢を描いているようです。

この本を読むと子どもの頃を…家の出窓から眺めた花火大会、「お地藏さん」で友達と遊んだこと、灯籠流し、学校の帰り道草花で遊んだこと、家に帰ると勝手にあがった近所のおばさんが「ひろよしちゃんお帰り。お母さん出かけてはるみたいやわ。お茶でも飲んでいっしょに待とか」と出迎えてくれた…そんな頃を思い出します。そして懐かしさと大きな喪失感を覚えます。ノスタルジーにひたるだけでは何も変わりはないと思いつつも、少しピュアな心を取り戻せるかもと思うのです。

（京都事務所 もりかわ ひろよし）

まちかど

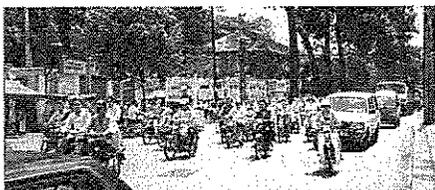
混沌の中の、しなやかなベトナム体験

馬場 正哲

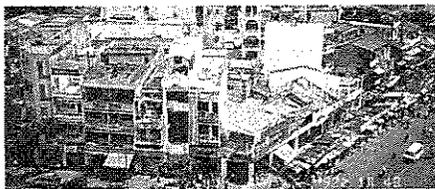
ベトナムのホーチミン市を訪れた。私の先入観には、フランス植民地支配、ベトナム戦争、カンボジア紛争など支配と抵抗と戦禍のまちサイゴンがあった。しかし、案内のファンさんは75年の解放の時10才だったが戦争の記憶がない、市内にも戦禍の面影はない。

市中では、真っ白なアオザイの美少女や人々の笑顔以外ベトナムらしいものもなく、フランス植民地の名残を残し、ドイモイ政策で社会主義国の印象もなく、上海やバンコックなどで見た発展の加速のついた東南アジア的活気そのものがある。

少し違うのが「ホンダ」（バイクのことを言う）と自転車の洪水。いきなり便利な「ホンダ」が主導権を持つのがベトナムらしく、バイク専門街があり、沿道サービスの半分はこれに関連するお店だったような気がする。



交通はバイク、自転車が主流で、何故か歩行者が少ない



町家の建替え、バンシルビルが連担していく

土地の使用権の売買、相続が認められ、市民は許可を得て自分の建物を取得できる。おまけに、道路まで使用権が売買されている節があり、早朝におばさんが路上の駐輪「場」を仕切っていたりする。

経済の好転で建築ラッシュが始まっている。町家はフランス時代の2、3階の屋根付連棟長屋が多い。その棟割りごとに改修したり、増築したりしている。

建替で目立つのは5、6階の鉄筋コンクリート造。1、2階は店舗でその上が住居、最上階はテラスで植栽が施されたり、家族の憩いの場や「敬けんな場」となっている。つまり、ベトナム人は家族と先祖・宗教を大切に。当然、敬うべきものが最上階に置かれる。よく視ると部屋の外に「祠」が安置され、窓から拝む形が多い。だんだん、これが高じて、宗旨の象徴物となり、ついには道路に向かって安置され、建物自体がキリストの像であったり、布袋さんであったり、お釈迦様であったりの風となる。ベトナム人の資質文化を感じさせる。

(大阪事務所 ばば まさあき)



最上階にイエスの像が下界をみおろす

アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社 〒600京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- 九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673